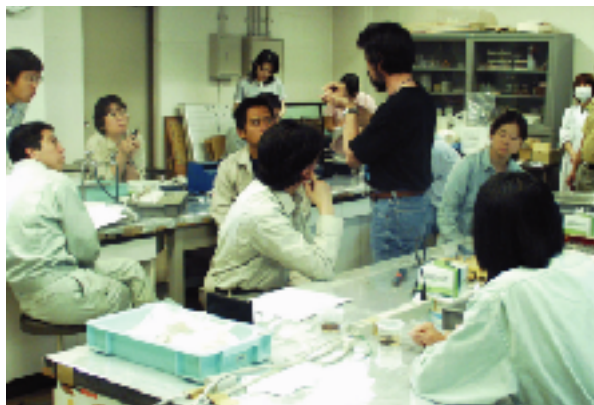




金属器保存処理実習

掘現場で保存科学の知識を活かしたいという方もおり、立場はそれぞれ違っていました。今回の研修を受けることで、保存処理のマニュアル作り、外注に際して留意しなければならないこと、遺物の取り扱いなど多くの点で認識を新たにできたとの感想が寄せられました。研修生の皆さんがこの研修の成果を埋蔵文化財の保存に活用されることを期待しています。



脆弱遺物の取り上げ実習

発掘技術者専門研修「遺物撮影課程」

今年度は「遺物撮影課程」を、4月17日から24日までの短期で実施しました。応募は思いのほか多く、募集定員を遥かに超える盛況ぶりで、最終的には20名を対象としました。

この研修は、8月から9月に実施する「文化財写真課程」の期間が長過ぎて、参加したくても難しいという自治体や機関の意見に答えようというのが第一の目的でした。また昨今の発掘調査における記録の方法や報告書編集の意識を見ていると決して最良とは言いがたく、写真を通して「文化財における記録とは」ということをもう一度見つめ直す必要があり、そのためにもより多くの調査員や学芸員の方々と意見交換の機会が欲しいという思いもありまし

た。さらに、すでに文化財写真課程を受講した方々から、基礎編だけではなく応用編の機会も欲しい、という意見があり、これに対処することもひとつの目的でした。

この課程は初めて実施するというのもあって、応募者の写真技術はどの程度なのか、また考え方や意識はどうか、といろいろと不安でした。心配はほぼ適中し、文化財写真課程と同様に基礎編から始めなくては何も通じないのです。しかも文化財写真精神論からでなくては。また、写真記録法に関しても問題点が多々ありました。特に、写真の評価をしようとしなから良否の判定ができないのです。急遽2日目から応用組（3名）と基礎組（17名）とに分けて研修を実施することにしました。

結果として、我々の感想は「期間が足らん」であり、研修生は「短い」でありました。しかしたとえ短い期間であっても実施してかなりの手応えがありました。きっと研修生も「よかった」と感じてくださったことでしょう。（埋蔵文化財センター）

▲ 春期特別展示『あすか以前』

飛鳥資料館では、毎年、春と秋の2回にわたって特別展示をおこなっています。今年度、春の特別展示は、明日香村教育委員会、桜井市教育委員会、奈良教育大学の協力を得て、飛鳥地域の飛鳥時代以前の出土遺物を中心に「あすか以前」と題して、2002年4月23日～6月2日の会期で開催しました。また、この展覧会に伴い、平城宮跡発掘調査部の深澤芳樹による特別講演会「弥生時代の集落、森のムラ」を5月11日に当館の講堂にて開催しました。講演会は、多くの方にご来場いただき、大変盛況なものとなりました。

飛鳥地域は古墳時代の終末期から、ようやく成立しようとする日本という国の最初の首都として、日本史上に特別な意味を持つこととなります。『日本書紀』に書きとどめられた古代の都としての「飛鳥」と、都にかかわるさまざまな遺跡は、広く世に知られ注目を集めていますが、それ以前のこの土地の歴史については、あまり話題に取り上げられることもないというのが現状です。

今回の展示は、日本史の表舞台に登場する以前の、この地域の歴史的な変遷をたどり、縄文・弥生・古

墳各時代の飛鳥地域の遺跡・遺物の概要を広く一般に紹介しようと企画したものです。この展示によって、地理的にも、経済的にも、有利な立場にあったとは言いがたい土地、この飛鳥がどのようにして、この国の政治・文化の中樞になっていったのかを、各人があらためて見直す契機になれば幸いと考えております。(飛鳥資料館)

▲ 居徳遺跡群出土の人骨

居徳遺跡群は高知県土佐市高岡町所在の縄文後期から中世に渡る複合遺跡で、高知県立埋蔵文化財センターが発掘をおこない、出土した骨を古環境研究室に鑑定を依頼してきたものです。奈文研ではその中に含まれていた人骨について3月19日に記者発表をおこない、大きなニュースになりました。それは以下のような人為的な損傷痕を持っていることによります。人骨は縄文晩期後半の刻目突帯文土器を含む窪地から出土し、部位別では大腿骨が左6点、右3点、計9点と計15点の過半数を占めています。

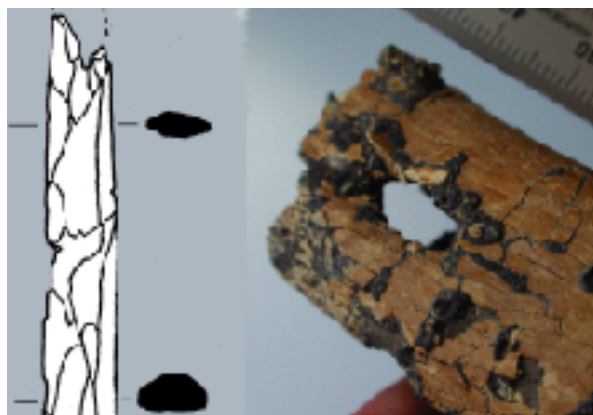
貫通痕 成人女性の左大腿骨の膝のやや上部を正面、斜め上方より幅9mm、厚さ4mmの断面半月形の孔が貫通しており、この断面は一般的な骨鏃の断面と一致します。患部がめり込んでいることから、生前の軟性を持っているときの傷であることがわかり、衝撃の激しさを示しています。裏面は衝撃のため、広い



範囲に渡って吹き飛ばされ、こ 膝上部骨貫通痕
れは弾丸の貫通した骨の特徴にも共通します。

創傷痕 貫通痕が見られる同じ大腿骨の近位部には、鋭利な刃物によってまっすぐに切り込まれた創傷が残っています。創傷は骨体の表面、裏面ともに残存部全周にわたり、太股を付け根付近で切断しようとして一撃で切り込んだものの切断には至らず、刃を抜いた後、残存部の弾力によって傷は閉鎖し一条の線として観察されるのみです。頑丈な管状骨をゴムホースのように斬り込めるのは薄くて鋭利な刃でなければ不可能です。

刺突痕 大腿骨の遠位端、近位端を欠損した骨幹部の前面に計8カ所のノミ状の工具による刺突痕が残



貫通痕と実測図

っています。それぞれ1cmから2cm内外の間隔で、あるいは2つずつ突き刺されたと考えられます。刃の形状は、幅約1cmの爪形を呈し、一カ所で刃が欠けている特徴が共通し、同じ刺突具によることを示します。傷の形状からすると、骨がまだ生の弾力のある状態で刻まれたと考えることができます。

その特徴 いずれの骨も風化の痕跡は見られず、死後、さほど間をおかずしてこの窪地に投棄され埋没したものです。同時に出土したイノシシやシカの傷と、人骨に見られる創傷、刺突傷とを比較すると、前者が筋肉を取ることを目的としたことが明かであるのに対し、後者は四肢を損壊させる意図を窺われます。したがって、人骨の傷は、食人を目的としたものではなく、犠牲者に対する畏怖、憎悪を窺わせるものでしょう。少なくとも9人以上という死者の数に対して、頭蓋骨の破片2点を除けば、椎骨をはじめとする中軸骨や四肢骨の関節部が皆無であるという特異な出土部位の偏りも指摘できます。

(埋蔵文化財センター)

▲ 高山市伝統的建造物群保存対策調査

建造物研究室では、2001・2002年度の2カ年をかけて岐阜県高山市の伝統的建造物群保存対策調査をおこなっています。この調査は、重要文化財の^{しもにのまち}日下部民芸館と吉島家が並ぶ地区を含む、^{おお}下二之町・^{じん}大新町地区を対象に、新たな伝統的建造物群保存地区(伝建地区)としての価値を調査し、そしてその保存計画立案を準備することを目的としています。高山市にはすでに伝建地区に選定されている^{かみさんまち}上三町保存地区がありますが、実はこの地区の基礎調査も奈文研が1970年代に担当しており、30年越しの調査ということになります。